▲ 職人の鷲巣恭一郎（わしずきょういちろう）さん(上) 製茶工場の製造工程から出た茶渋などを染料にした「お茶染め」を県内の茶産地の文化にしたいと活動をしている

きっかけは**偶然**の出会い 夢への挑戦が始まる

「なんでみんな町を出てってしまうのかねぇ」大井川鐵道のSLの警笛が響く店内で、小さくつぶやいた西條和子さん(桑野山区)。12年前に川根本町に移住して以来、地域の活気が徐々に失われていく様子に、はがゆさを感じていました。
何かできることがあるはずと、西條さんの挑戦が始まりました。

おばちゃんと職人が出会う きっかけは1枚のワンピース

挑戦への第一歩は6年前にさかのぼります。静岡市にある小物店に立ち寄った西條さんは、1枚のワンピースに心奪われます。独特な色合いや、かわいいデザイン。聞けば県内の職人がお茶で染め上げた物だと分かりました。

「私もお茶染めをやってみたい」西條さんは思い立ち、すぐに職人に会いに行きました。

その後の出会いが、今に続く川根本町の未来を動かすきっかけにつながっていくのです。

川根本町にお茶染め文化を根付かせたい

「元気なおばちゃんだなぁ」

鷲巣恭一郎さんは西條さんとの出会いを笑顔で振り返ります。

静岡市の鷲巣染物店の5代目を継ぎ、伝統工芸「駿河和染」の技術や文化を、県内の茶産地に広めようと活動する鷲巣さん。「お茶染めを文化として産地に根付かせるには、現地の人が主体的に取り組むことが必要。お茶染めに誇りと情熱を寄せてくれれば、自然と理解者が増え、地域の産業の一つになるはず」と考え、各地でお茶染ワークショップや企業との商品開発を積極的に行ってきました。

鷲巣さんの思いに触れた西條さんは「川根本町の特産とお茶染めがつながれば、きっと川根本町にしかないものが作れる」と考えるようになりました。

お茶染めプロジェクトが誕生 二人の思いが町に広がる

重なった二人の思いが、形になり始めたのは昨年の5月頃。二人の思いを聞いた観光商工課や地域おこし協力隊の伊神花織さんが動き出しました。

川根高校の魅力化コーディネーターとして活動している伊神さん。「お茶染めを文化として町に根付かせていくためには、教育機関との連携が重要」と話し、「町をよく知る子どもたちが積極的にお茶染めに関われば、町全体がお茶染めに関心を抱く機運が高まるはず」と続けます。

西條さんと鷲巣さんの偶然の出会いから、川根本町お茶染めプロジェクト(以下、「お茶染めプロジェクト」)がここに誕生し、二人の思いが町に広がっていくのです。

川根本町の未来のために挑戦が始まる

お茶染めプロジェクトは、地域との連携を望んでいた町内の小中学校と学校独自の科目「地生学」の題材を探していた川根高校に協力を呼びかけました。

川根本町らしさがあり、さらにこの町でしか手に入らない物を作る。そして特産品として広く販売することを目標に、昨年の6月から、それぞれの学校で取り組みが始まりました。

【特集】お茶染めプロジェクトの軌跡

ふるさとをつなぎたい。未来へ

人口減少や高齢化、地域産業の後継者不足…。
この町を取り巻く問題は、日を追うごとに深刻さを増しています。
それでも、この現状を黙って見ているわけにはいかないと、川根本町のお茶の新たな可能性を信じて挑戦を始めた人たちがいます。「この町を未来につなげたい」。そのひたむきな思いは、今年、町全体を巻き込む大きな活動につながっていきました。